



碁石埼灯台利活用プロジェクト（灯台×郷土の偉人×漁業の礎）

コンソーシアム名：碁石埼灯台利活用コンソーシアム

対象灯台：碁石埼灯台（岩手県大船渡市）

調査検証について

碁石埼灯台（岩手県大船渡市）

碁石埼灯台利活用プロジェクト

コンソーシアム名 碁石埼灯台利活用コンソーシアム

構成団体

大船渡市 大船渡市観光物産協会 大船渡市漁業協同組合
株式会社岩手朝日テレビ

1.調査・検証概要

調査検証を構想した背景

- ◎大船渡は古くから漁業の町として発展し、碁石埼灯台は入り組んだ海岸を航行する船の目印として、漁業の安全を支えてきた。
- ◎水上助三郎は大船渡出身の実業家で、オットセイ猟で成功を収めた後、養殖や加工など“育てる漁業”を広めた先駆者である。
- ◎助三郎の出身地・吉浜ではアワビの乱獲を防ぎ、品種改良を進めたことで「吉浜あわび」が高級食材としてブランド化された。
- ◎助三郎の功績を伝える教育プログラムを通じ、海や灯台への関心を高め、観光資源としての活用や地域の魅力発信を目指す。



2.調査検証の目標～明らかにしたい仮説

仮説のメインテーマ：灯台×郷土の偉人×漁業の礎の事業で、灯台を訪れる人を増やす

2011年に発災した東日本大震災津波や2025年3月に発生した大規模林野火災など、大船渡における自然の脅威を見守り、大船渡の入り組んだ沿岸の船舶の目標となっている碁石埼灯台。育てる漁業の礎を築いた郷土の偉人「水上助三郎」の功績を改めて学び、子供たちとの教育プログラムをイベント化することで、改めて灯台に集客し、灯台を訪れる人を増やす。このことによって、漁業の大船渡市への関心を高め、災害を乗り越える復興支援にもなり、大船渡への観光客を増やすことに寄与することとあわせ、地域の子供たちに大船渡の魅力を再認識してもらう。

survey 01

碁石埼灯台の基礎調査

- ・文献調査（偉人の生家訪問でのヒアリング、図書館の郷土史コーナー・郷土研究家、他）
- ・関係者インタビュー（釜石海上保安部、郷土研究家、漁業組合関係者、他）

survey 02

有識者検討会の実施

- ・大船渡ならではの漁業の特徴などの情報収集、資料の収集やヒアリングをし、関係者による有識者検討会を実施
- ・灯台の周辺の状況を確認し、看板設置のための可能性を調査

survey 03

連携や事業化の可能性調査

- ・関係者参加でのワークショップをイベントの実施前に1度実施
- ・ワークショップを踏まえ課題の抽出とスケジュール調整

survey 04

教育プログラムとしてのイベント体験ツアー実施

- ・20組前後の親子参加型体験ツアーを想定
- ・灯台からの大船渡湾の眺めを確認
- ・水上助三郎の功績を学ぶ
- ・大船渡で生産・水揚げされた海産物を味わい、育てる漁業の仕組み等を学ぶ
- ・碁石海岸穴通船に乗って、碁石埼灯台の「表の顔」を海から眺める

survey 05

看板の設置とパンフレット製作

- ・灯台周辺に今回の関係性を伝える看板を設置
- ・今回の関係性を勉強できる印刷物を制作
- ・体験ツアーのときはもちろんのこと、大船渡の小学校へ配布することで今回の関係性を学ぶきっかけを作る

survey 06

教育プログラムとしての体験型総合学習実施

- ・総合学習として、助三郎が建設に尽力し銅像が残る吉浜小学校の子供たちが碁石埼灯台に行き、郷土の偉人の功績を勉強してもらい、灯台が見守る大船渡について改めて学ぶ





ごいしざきとうだい
碁石埼灯台

基礎 データ 	初点灯	1958（昭和33）年1月10日
	灯台の高さ	10m
	灯りの高さ	36.3m
	灯質	群閃白光
	光達距離	約9km
	レンズ	不明
	構造	コンクリート造
	形状	白色塔形
設計者	不明	

設置された経緯

1953（昭和28）年に大船渡市は臨海工業モデル地区に指定されました。指定によって大船渡港を使う船が急に増えたため、当時すでにあったコオリ埼灯台（赤崎町外口）だけでは船の安全でスムーズな運行が難しいと考え、大船渡市は国に碁石埼灯台の設置を求めます。その結果、1958（昭和33）年1月10日に碁石埼灯台が建てられました。



関係者インタビュー（抜粋）



釜石海上保安部
交通課
専門官
佐藤 幸夫



気仙歴史文化
研究会 会長 /
元大船渡市長
甘竹 勝郎

昭和32年前後、大船渡湾では臨海工業都市化で船舶が増し、沖合では暖流・寒流の交差による濃霧が多発して航行が困難となっていた。既存標識では不十分との請願を受け、船舶の安全確保のため碁石埼に灯台が新設された。

灯台は船のためだけではなく、光が方向性を示す大きな力を持つ。海で生きる人々は灯台の尊さを知り、陸にいる者も太平洋からの光に心を打たれる。灯台の威力は想像以上で、碁石埼灯台は大船渡港の道しるべとして欠かせない存在だ。

大船渡の発展に光を灯した 郷土の偉人と碁石埼灯台

元治元年（1864年）に現在の大船渡市吉浜地区で生まれた水上助三郎。

オットセイ猟で財を成します。助三郎はその財を地元に戻元。

中でも、効果が大きかったのは吉浜地区でのアワビの保護繁殖でした。

アワビの漁区を自腹で借り受け、

漁期を3カ月から1カ月に制限、三寸以下のものは捕獲しないという規則をつくった結果、

アワビのサイズが大きくなり、収量も向上。

「吉浜（きっぴん）アワビ」として珍重される品質にまで回復しました。

その後、地域を豊かにするために活躍したのが大船渡市末崎地区の小松藤蔵です。

昭和28年（1953年）にワカメ養殖の研究を始め、

昭和32年（1957年）に技術を確立すると地域や全国の漁業者に無償で教えました。

藤蔵が生まれた末崎地区は碁石埼灯台が建つ地域になります。

昭和28年（1953年）に大船渡湾が臨海工業モデル地区に指定。

大船渡市は安全のために昭和30年（1955年）に碁石埼に灯台を新設することを請願します。

こうして昭和33年（1958年）に建設された碁石埼灯台は

77年もの間、大船渡市の漁業や工業の発展に寄与しています。



有識者検討会の実施

参加者それぞれが専門的立場から「灯台×郷土の偉人×漁業の礎」を軸に、碓石灯台の歴史、地域の偉人である水上助三郎氏、ワカメ養殖をはじめとした漁業の歩みなどについて意見を交わし、観光振興や地域資源としての可能性について多角的な議論が行われた。



ワークショップを開催

碓石海岸穴通船へ乗船し、海上から碓石灯台を見学。地域の漁業従事者やツアーガイドの案内を受けながら、親子向け教育プログラム体験ツアーに向けた体験内容の検証や行程の確認を行い、漁業の歴史や自然環境に関する知見を深めた。



モニターツアーの実施

親子9組22名が参加し、碓石灯台周辺で体験ツアーを実施。灯台まで歩いて自然環境を学んだ後、灯台見学と座学で歴史や役割を学習。わかめ養殖発祥の碑見学や種付け体験、碓石海岸穴通船での海上からの灯台観察を行い、最後に地元食材を使った昼食を味わいながら大船渡の魅力に関する理解を深めた。



総合学習の実施

末崎小学校3・4年生37名を対象に「碓石灯台×郷土の偉人×漁業の礎」をテーマとした体験型総合学習を実施。灯台の講話や内部見学、碓石海岸のガイドウォークを通じて海と人の関わりを学んだほか、わかめ養殖発祥の碑や大船渡港湾口防波堤記念碑を見学し、地域の漁業や防災を支えてきた先人たちの功績に触れた。体験を通して、児童たちは灯台や漁業の役割への理解を深め、ふるさとの海への関心と誇りを育む機会となった。

課題

地元・大船渡の方々の中でも、「碁石埼灯台」を訪れた経験のない人が多い

調査や各種ヒアリングを重ねる中で、地元・大船渡で暮らす人々の間でも、これまで碁石埼灯台を訪れた経験のない方が多くいることが明らかになった。



施策

親子向け体験ツアーや小学校での総合学習で「碁石埼灯台」を見学

親子向け体験ツアーや小学校での総合学習の行程に碁石埼灯台の見学を組み込み、地域の子どもや保護者が灯台に触れる機会を創出した。現地では座学やクイズを実施し、単なる見学にとどまらない学びの場を提供した。また、体験ツアーでは穴通船に乗船し、海上から普段は目にすることのできない碁石埼灯台の“表の顔”を観察するプログラムも導入。陸上と海上の双方から灯台を学ぶことで、多角的な理解促進につながった。

課題

「碁石埼灯台」を訪れても「碁石埼灯台」について理解を深める資料がない

碁石埼灯台前には、位置・構造・光度などの基本情報を示す看板は設置されているものの、灯台が誰によってどのような目的で建てられたのかを知る資料がなく、訪れても単に灯台を眺めるだけで理解が深まらない状況であった。



施策

「碁石埼灯台」の設置経緯を調査し調査結果を反映した看板を制作・設置

釜石海上保安部へのインタビューや文献調査を実施し、碁石埼灯台の設置背景や関係者の足跡について詳細な調査を行った。その結果をもとに、新たに灯台の設置経緯や水上助三郎をはじめとした郷土の偉人の功績を記した解説看板を制作・設置。これにより、碁石埼灯台と大船渡の漁業の礎を築いた偉人たちとの関係を訪問者が理解できるようになり、灯台をより深く学べる環境が整った。

課題

地元の子どもたちは大船渡の漁業の礎を築いた「水上助三郎」や「碁石埼灯台」との関わりを知る機会が少ない

碁石埼灯台や水上助三郎をはじめとした郷土の偉人に関する資料は多くない。関係者が存命であるにもかかわらず、子どもたちがその人物像や灯台との関わりを十分に知る機会がない状況である。そこで、改めて「碁石埼灯台」と「郷土の偉人」について、子どもたちが触れられる機会をつくれなかと考えた。



施策

郷土の偉人を調査しパンフレットを制作 地元・大船渡市の全小学生に配布

有識者検討会を開催し、関係者にも参加いただき、灯台と漁業、そして郷土の偉人との関連について、これまでの調査内容をもとに議論した。そこで得られた情報や調査結果を基にパンフレットを制作し、地元・大船渡市の小学生全児童に配布した。子どもたちが郷土の歴史と偉人について知るための機会を設けた。

岩手朝日テレビ

2025年8月28日(木)『スーパーJチャンネルいわて』内



岩手朝日テレビ

2025年10月22日(水)『スーパーJチャンネルいわて』内



岩手朝日テレビ

2025年11月10日(水)『スーパーJチャンネルいわて』内



岩手朝日テレビ

2026年1月23日(金)『スーパーJチャンネルいわて』内



調査検証をふまえた 今後の展開案

事業背景1

碓石灯台×郷土の偉人×漁業の礎は、歴史・教育・観光の要素を併せ持つ魅力あるコンテンツである

灯台の歴史や役割、水上助三郎氏をはじめとする郷土の偉人、わかめ養殖に代表される漁業の歩みを一体的に学ぶことで、灯台の地域資源としての価値を高められる可能性が確認された。

碓石灯台周辺をフィールドとした体験ツアーや学習プログラムを通じ、陸（灯台見学・ガイドウォーク・座学）と海（穴通船による海上見学）の双方から灯台を捉える行程は、参加者の理解を深める有効な手法である。

親子向け体験ツアーや小学校での総合学習において、灯台見学、漁業体験、郷土の歴史学習、地元食材を活用した食体験を組み合わせることで、単なる見学にとどまらない「実体験型」の学びを提供できた。

事業背景2

碓石灯台を地域資源として磨き上げ、学びと観光の両面から次世代へ継承する

碓石灯台×郷土の偉人×漁業の礎を軸とした新たな観光・学習コンテンツを、一過性の取組に終わらせず、地域の「定番」として定着・安定させていく。これまでの体験ツアーや学習事業で得られた成果を踏まえ、継続実施を前提とした内容の整理と磨き上げを行う。

碓石灯台を拠点とする観光コンテンツが将来的にも継続して残るよう、漁業関係者、ツアーガイド、教育機関、行政など関係者間の連携体制や役割分担を整理し、組織的な運営体制の構築を図る。来年度以降の発展的な展開につなげるため、関係性の安定化と連携強化を進める。

次世代への継承を見据え、親子で参加できる体験型イベントや学習要素をさらに充実させる。子どもたちが楽しみながら灯台や地域の歴史・産業に触れ、将来にわたって受け継いでいきたいと思えるような仕掛けを取り入れ、継続的な関心と愛着の醸成を図る。

事業概要

事業名 碓石灯台を拠点とした学びを未来につなぐ教育プログラムの定着

碓石灯台を教材として、地域の歴史や漁業、自然環境への理解を深める教育プログラムを展開する。子どもや親子が体験を通して学び、次世代へと受け継がれる定番の学習コンテンツとして定着させる。



事業名：碓石灯台を拠点とした 学びを未来につなぐ教育プログラムの定着



熱源となる人たち
(核となる主体者)

碓石灯台利活用コンソーシアム



熱源を支える人たち
(その他の主体者)

大船渡市役所
商工港湾部観光交流推進室

大船渡市観光物産協会

岩手朝日テレビ



協力者

海上保安庁
釜石海上保安部

大船渡市教育委員会
大船渡市内の小・中・高校など

大船渡商工会議所
地元事業者

事業名：碓石灯台を拠点とした 学びを未来につなぐ教育プログラムの定着

新たな灯台利活用モデル事業が定義する「自走化4分類」のうち、本事業は以下を目指します

本事業が 目指す型	分類	自走化の方法	中心となる事業者
	I ビジネス型	灯台および付属施設等をホテルなどに利活用する、 または 灯台および周辺地域の魅力をコンテンツとして利活用することで、 <u>ビジネスとしての収益化を達成し、自走する。</u>	民間事業者
	II 非営利 収支均衡型	灯台及び周辺施設等を活用し、 イベント開催や観光ガイド等を組織しながら、主として、 <u>収支均衡となるような小規模の地域活性化事業を行い、 非営利団体として、自走する。</u>	非営利任意団体、 NPO等
✓	III 自治体 補助金型	自治体が主体となり、 新たに地域課題や観光資源の一つとして 灯台及び周辺施設等を位置づけることにより、 <u>自治体の予算やリソースが投入され、自走する。</u>	自治体
	IV お祭り協賛型	灯台に係るイベントを開催することで、 灯台を含むエリアの新たな価値と集客・PR効果を創造し、 <u>地元自治体や地域企業からの協賛金や、出店料、 参加者から入場料などの イベント収益によって、自走する。</u>	イベント事業者、 放送局

調査検証資料

B2ポスター

**碓石灯台と漁業から学ぶ
おおふなとのミリョク
再発見ツアー**

船に乗って海から見る碓石灯台や養殖わかめの作業体験などを通して、大船渡の魅力を見つけるツアーです。親子で参加してみませんか？

参加無料

参加者全員に
オリジナルステッカーや
灯台カードなどのお土産付き！

実施日時
2025年11月8日(土) 8:30~14:00

募集定員 親子9組 計18名
※申し込み先着順となります。定員になり次第、締め切らせていただきます。

ガイド・解説
◎ウォーキングガイド：村上航さん (碓石海岸インフォメーションセンター) ◎漁師：吉田力男さん

主催 碓石灯台台活用コンソーシアム

協行 岩手開発産業株式会社

お問い合わせ先
碓石灯台台活用コンソーシアム

タイムスケジュール

- 8:30 大船渡温泉駐車場集合 (住所：岩手県大船渡市大船渡町字丸森29番1) ※集合場所からは貸切バスで移動します。
- 9:00 碓石灯台ガイドウォーク
- 9:30 碓石灯台見学
- 10:10 海菜荘「わかめ養殖発祥の碑」へ
- 10:30 「わかめ作業場」へ(徒歩約5分) 養殖わかめの作業見学・ロープ種付け体験
- 11:00 碓石漁港へ「碓石海岸穴通船」クルーズで海上から灯台の「表の顔」を見学
- 12:00 クルーズ終了 バスにて大船渡温泉へ移動
- 12:30 地元海産物(鮑やわかめ等)を使用した昼食・休憩
- 14:00 終了・解散 ※希望者は大船渡温泉にて日帰り入浴可能(当日利用のみの入浴券プレゼント)

※雨天の場合はスケジュールが変更になる場合があります。

お申し込みはこちら！

A4チラシ

**碓石灯台と漁業から学ぶ
おおふなとのミリョク
再発見ツアー**

船に乗って海から見る碓石灯台や養殖わかめの作業体験などを通して、大船渡の魅力を見つけるツアーです。親子で参加してみませんか？

参加無料

参加者全員に
オリジナルステッカーや
灯台カードなどのお土産付き！

実施日時
2025年11月8日(土) 8:30~14:00

募集定員 親子9組 計18名
※申し込み先着順となります。定員になり次第、締め切らせていただきます。

ガイド・解説
◎ウォーキングガイド：村上航さん (碓石海岸インフォメーションセンター) ◎漁師：吉田力男さん

主催 碓石灯台台活用コンソーシアム

協行 岩手開発産業株式会社

お問い合わせ先
碓石灯台台活用コンソーシアム

タイムスケジュール

- 8:30 大船渡温泉駐車場集合 (住所：岩手県大船渡市大船渡町字丸森29番1) ※集合場所からは貸切バスで移動します。
- 9:00 碓石灯台ガイドウォーク
- 9:30 碓石灯台見学
- 10:10 海菜荘「わかめ養殖発祥の碑」へ
- 10:30 「わかめ作業場」へ(徒歩約5分) 養殖わかめの作業見学・ロープ種付け体験
- 11:00 碓石漁港へ「碓石海岸穴通船」クルーズで海上から灯台の「表の顔」を見学
- 12:00 クルーズ終了 バスにて大船渡温泉へ移動
- 12:30 地元海産物(鮑やわかめ等)を使用した昼食・休憩
- 14:00 終了・解散 ※希望者は大船渡温泉にて日帰り入浴可能(当日利用のみの入浴券プレゼント)

※雨天の場合はスケジュールが変更になる場合があります。

お申し込みはこちら！

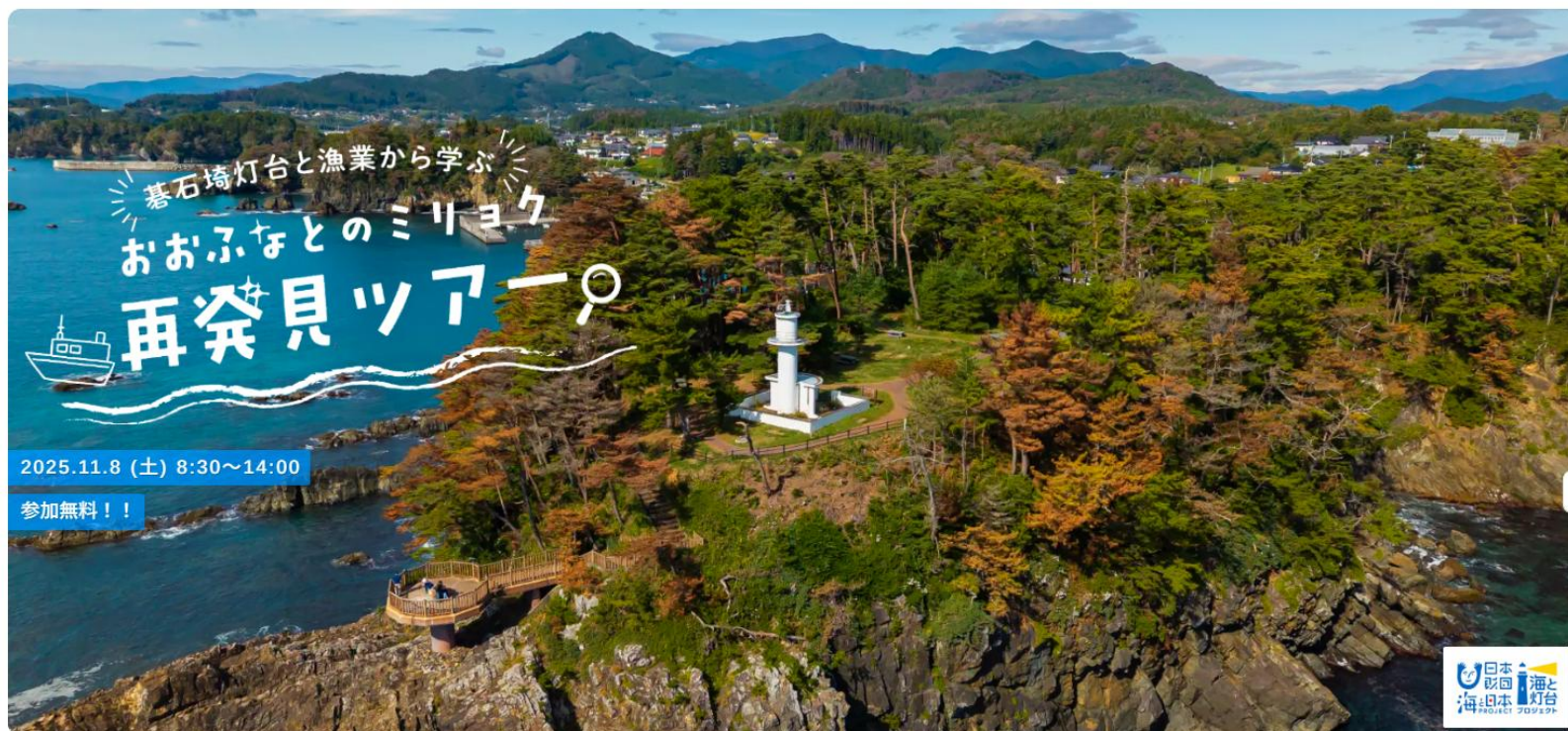
灯台と先人の物語
大船渡の光

- イベント概要
- スケジュール
- ガイド・解説
- 碓石埼灯台

イベントに参加する

先着9組の親子向けツアーです！
お早めにお申し込みください！

岩手県大船渡市 海



イベント概要

碓石埼灯台と漁業から学ぶ「大船渡の魅力再発見ツアー」

船に乗って海から見る碓石埼灯台や養殖わかめの作業体験などを通して、大船渡の魅力を見つけるツアーに、親子で参加してみませんか？

参加者全員に「海と灯台」ウィークオリジナルステッカーと灯台カード、オリジナル缶バッジをプレゼント！

■実施日時：2025年11月8日（土）8:30~14:00

■募集定員：親子9組（計18名）

※申し込み先着順です。定員になり次第、締め切らせていただきます。

■参加費：無料！

主催／碓石埼灯台利活用コンソーシアム

催行／岩手開発産業株式会社

お問い合わせ／碓石埼灯台利活用コンソーシアム

IWATE OFUNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OFUNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OFUNATO GOISHIZAKI TODAI

灯台と先人の物語 大船渡の光

- プロジェクト
- 大船渡の光
- 活動報告
- 動画を見る



碓石灯台と水上助三郎
二つの「光」が照らした大船渡の未来

News!!

2025年11月8日に開催した「おおふなのミリヨク再発見ツアー」のイベントレポートを公開！

JHUNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OFUNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OFUNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE

活動報告



2025/11/12 イベントレポート

おおふなのミリヨク再発見ツアー

身近にありながら、なかなか知ることのなかった大船渡の魅力を掘り下げる「おおふなのミリヨク再発見ツアー」を2025年11月8日に実施。参加者は地元大船渡市の方々でしたが、「灯台に来るのは初めて」という...

大船渡の光

碓石灯台



灯台館を眺む



水上助三郎

先人館を眺む



灯台の歴史

1853（嘉永6）年の「ペリー来航」により鎖国が終わり外国との交流が始まると、夜でも船が安全に航行できるようにしてほしいと諸外国から求められるようになります。この求めを受けて1866（慶応2）年に8灯台の設置を約束する「江戸条約」をイギリス・フランス・アメリカ・オランダの4ヶ国と結んだことが日本の灯台の歴史が始まります。

江戸時代から明治時代になり、1869（明治2）年に点灯した日本初の西洋式灯台・観音崎灯台（神奈川県）と2番目の野島崎灯台（千葉県）はフランス人技師のレオンス・ヴェルニーが設計しました。3番目に点灯した檜野崎灯台（和歌山県）からはイギリス人技師のリチャード・ヘンリー・プラントンが灯台の設計を任せられます。プラントンは8年間の滞在中に26灯台などを建設し、日本の灯台の基礎を築きました。

灯台の役割とは？



「獲る漁業」から「耕す漁業」へ



助三郎のふるさと吉浜村では、アワビ漁が盛んに行われていました。しかし、やたらに捕っていたためアワビが小さくなり、量も減っていました。助三郎は、1903（明治36）年に吉浜村漁業組合の理事になると三寸（約10cm）以下のアワビを捕ることを禁止。次の年には、漁ができる期間を3月から1か月に減らしました。1908（明治41）年には自分のお金で吉浜島頭湾にあるアワビの漁場を借りて、漁師が勝手に捕らないようにしました。

その結果、量が多くなっただけでなく、形が大きく、品質もよくなりました。今や高級食材として知られる「吉浜（きっぴん）あわび」の誕生です。この後もワカメ加工、宮城県松島市のカキ養殖など、現在につながる数多くの事業などに取り組み、三陸漁業の振興に大きな足跡を残しました。

みづかみすけさぶろう 水上助三郎

1864～1922年。
オットセイ漁で成功を取め、日本の漁業を開拓。その後、アワビの資源管理と漁業を両立させ、大船渡の振興に多大な功績を残した。

[WEBサイト](#)



IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI

灯台と先人の物語 大船渡の光

- プロジェクト
- 大船渡の光
- 活動報告
- 動画を見る



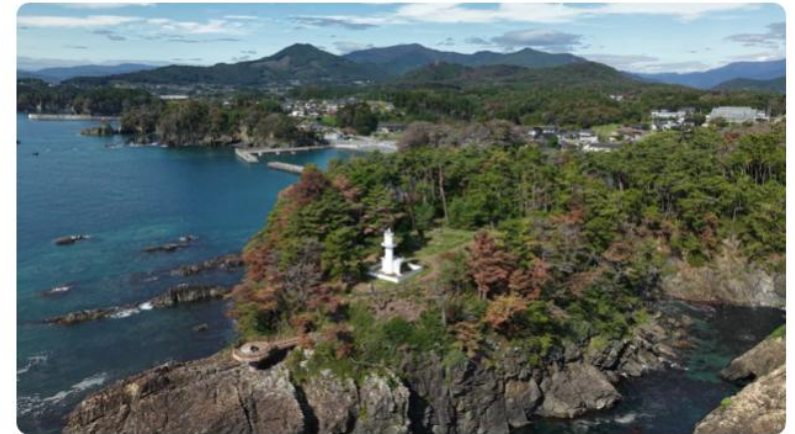
碓石埼灯台と水上助三郎
二つの「光」が照らした大船渡の未来

News!!

2025年11月8日に開催した「おおふなどのミリオク再発見ツアー」のイベントレポートを公開！

IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI IWATE OF UNATO GOISHIZAKI TODAI

動画を見る



[ウェブサイト内](#)で公開



二つの「光」が照らした大船渡市



碁石埼灯台という「光」

1953（昭和28）年に大船渡市は臨海工業モデル地区に指定されました。指定によって大船渡港を使う船が急に増えたため、当時すでにあったコオリ埼灯台（赤崎町外口）だけでは船安全でスムーズな航行が難しいと考え、大船渡市は国に碁石埼灯台の設置を求めます。その結果、1958（昭和33）年1月10日に碁石埼灯台が建てられました。時代は移り変わりましたが、今もなお、碁石埼灯台は大船渡を照らし続けています。

未来を照らした先人たちの「光」

水上助三郎は1864（元治元）年に気仙郡吉浜村千歳地区に生まれました。オットセイ漁で財を成しましたが、故郷大船渡の漁業が乱獲により危機に瀕していたことを知り、「獲る漁業」から「耕す漁業」への転換を図りました。吉浜村漁業組合の理事になると、アワビを捕る期間を限定し、高級食材「吉浜（きっぴん）アワビ」を誕生させました。この他にも、吉品乾鮑の製法を確立した伊藤菊之助、わかめ養殖技術を発祥させた小松藤蔵など、多くの先人たちが三陸漁業の振興に大きな足跡を残しました。

碁石埼灯台利活用コンソーシアム

